

日本語における「依頼・断り」のコミュニケーションについて

—日本人女子大学生同士の電話会話を分析対象に—

施 信余

キーワード

「依頼・断り」のコミュニケーション・「依頼行為成立」・「断り目的達成」・(表現)意図・配慮

1. 問題提起

これまでの「依頼表現」「断り表現」に関する先行研究は、主に調査紙を用いた談話完成テスト(生駒・志村 1993; 藤森 1995 など)やロールプレイ(横山 1993; 熊井 1993 など)の方法で調査されており、実際の自然な場面で使われるものにはほとんど焦点を当てていない。しかも、従来の「依頼表現」「断り表現」の研究では、表現や表現の展開を取り上げ、その丁寧度を、依頼または断りに関わる人間関係や依頼内容によって分析し、説明するものが主であった。例えば、依頼側と被依頼側の「上下・親疎」などの人間関係や、相手に掛ける負担の大きいものか小さいものかという依頼内容が、どのように敬語表現の選択や表現の展開に影響を与えるか、という事例が考察されてきた(森山 1990; ラオハブラナキッ ト 1995, 1997 など)。現実には、依頼や断りの表現を言うだけではなく、依頼側と被依頼側が、言語・非言語行動によって自分の意図¹を表明していこうとするその「過程」自体が、目的の達成には必要であろう。また、それと同時に、相手が言語・非言語行動によって自分をどう待遇するかを理解することも、自分の次の行動を展開するために必要になってくるであろう。

したがって、本稿では、日本人女子大学生の日本語による、依頼とそれに対する断りとを含む実際の電話会話を資料に、依頼側と被依頼側とのやりとりを相互関係と捉え、一連の会話展開の中で、依頼側と被依頼側が、相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するかについて検証する。

2. 用語の規定

2. 1 「依頼」と「断り」

本稿では、高木（2003）を参考に「依頼」と「断り」を以下のように規定する。

「依頼」は、自分から自覚的な意図を持って相手の行動展開を促す「行動展開表現」の一種であり、自分の利益になることを相手の行動によって実現する行為である。

「断り」は、「依頼」の働きかけを受けた被依頼側が、その働きかけを理解してはじめてその表現意図を持ち、依頼側から働きかけられた行動を実行しないことを自ら決定し、それにより相手の受けるはずであった利益を失わせる行為である。

2. 2 「依頼・断り」のコミュニケーション

ここでは、「依頼・断り」のコミュニケーションを、依頼側と被依頼側がそれぞれ、相手の表現意図²を把握したり、自分の表現意図を相手や状況への配慮を示しながら表明したりする相互行為であると捉える。

2. 3 「依頼行為成立」と「断り目的達成」

本稿でいう「依頼行為成立」とは、依頼側の表現意図が被依頼側に伝わったことを指す。すなわちあることをしてほしいという依頼側の意図が被依頼側に伝わり、それに対する被依頼側の「反応発話」³が現れたら、その会話において依頼行為が成立したとみなす。

一方、「断り目的達成」とは、依頼側が被依頼側の断りたい意思を認め、もうこれ以上依頼を継続しないことを指す。すなわち依頼側の「断りへの了解を示す発話」⁴が現れたら、その会話において断りの目的が達成されたこととする。

3. 検証資料の説明

3. 1 資料の収集方法

依頼側 13 名と被依頼側 39 名の計 52 名の日本語母語話者の協力を得た。調査協力者は日本に在住し、東京都内の大学に在籍する 10 代後半から 20 代前半の大学生または大学院生で、全員女性である。

調査者が依頼側の調査協力者に、普段気軽にものを頼めるような、ある程度親しい同性友人を選んでもらい、それぞれの相手に携帯電話から電話をかけて、あらかじめ決めた依頼内容に従って依頼をしてもらった。依頼内容は、「友人に、明日の午前中に自分の代わりに自分の男友達と一緒に国立国語研究所に行って言語調査に関する実験に参加してもらうこと」に設定したが、その詳細な内容や会話の順序に関しては、依頼側の調査協力者に任せることにした。依頼側の調査協力者に静かな場所から、できるだけ相手とゆっくり話せる時間に実験を行ってもらい、全部で 39 例を集めた。

会話収録後、被依頼側の調査協力者に実験だったことを告げて承諾を得た上で、会話資料の妥当性と分析結果の信頼性を裏付けるため、二次的データとして、調査協力者の双方にフォローアップ・アンケートを記入してもらった。

3. 2 資料の内容

あらかじめ決めた依頼内容は「用件レベル・+2」⁵に近いものであり、調査協力者である依頼側と被依頼側の人間関係は「相手レベル・-1~-2」⁶と考えた。検証資料の詳細は以下の【表1】の通りである。

【表1】検証資料

日本人女子大学生同士による電話会話			
資料番号	依頼側⇔被依頼側 (人間関係)	資料番号	依頼側⇔被依頼側 (人間関係)
1	JBI01⇔JOK01(同語科の後輩⇔先輩)	21	JBI07⇔JYK07(サークルの先輩⇔後輩)
2	JBI01⇔JSK01(同授業をとっていた同期)	22	JBI08⇔JOK08(サークルの後輩⇔先輩)
3	JBI01⇔JYK01(サークルの先輩⇔後輩)	23	JBI08⇔JOK13(サークルの後輩⇔先輩)
4	JBI02⇔JOK02(サークルの後輩⇔先輩)	24	JBI08⇔JSK08(サークルの同期)
5	JBI02⇔JSK02(同語科の同期)	25	JBI08⇔JYK08(サークルの先輩⇔後輩)
6	JBI02⇔JYK02(サークルの先輩⇔後輩)	26	JBI09⇔JOK09(同語科の後輩⇔先輩)
7	JBI03⇔JOK03(友人、学年下⇔学年上)	27	JBI09⇔JSK09(友人、同学年)
8	JBI03⇔JSK03(友人、同学年)	28	JBI09⇔JYK09(同語科の先輩⇔後輩)
9	JBI03⇔JYK03(アルバイト先の先輩⇔後輩)	29	JBI10⇔JOK10(同語科の後輩⇔先輩)
10	JBI04⇔JOK04(サークルの後輩⇔先輩)	30	JBI10⇔JSK10(サークルの同期)
11	JBI04⇔JSK04(同語科の同期)	31	JBI10⇔JYK10(同語科の先輩⇔後輩)
12	JBI04⇔JYK04(サークルの先輩⇔後輩)	32	JBI11⇔JOK11(同語科の後輩⇔先輩)
13	JBI05⇔JOK05(サークルの後輩⇔先輩)	33	JBI11⇔JSK11(中学からの友人、同期)
14	JBI05⇔JSK05(同語科の同期)	34	JBI11⇔JYK11(同語科の先輩⇔後輩)
15	JBI05⇔JYK05(サークルの先輩⇔後輩)	35	JBI12⇔JOK12(サークルの後輩⇔先輩)
16	JBI06⇔JOK06(アルバイト先の後輩⇔先輩)	36	JBI12⇔JSK12(中学、高校の同期)
17	JBI06⇔JSK06(同語科の同期)	37	JBI12⇔JYK12(同語科の先輩⇔後輩)
18	JBI06⇔JYK06(アルバイト先の先輩⇔後輩)	38	JBI13⇔JSK13(同語科の同期)
19	JBI07⇔JOK07(サークルの後輩⇔先輩)	39	JBI13⇔JYK13(サークルの先輩⇔後輩)
20	JBI07⇔JSK07(主専攻の同期)		

3. 3 文字化のルール

本稿では、依頼側と被依頼側それぞれの行動の展開を見やすくするために、発話者ごとに発話内容を縦に並べて文字化している。また、文字化で使用した記号に関しては、基本的に「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」(宇佐美 2003) に従っている。

4. 分析と考察

本稿では、「依頼・断り」のコミュニケーションにおける依頼側と被依頼側の相互関係を明らかにするにあたって、①会話開始から「依頼行為成立」まで、②「依頼行為成立」から「断り目的達成」まで、③「断り目的達成」から会話終了までの三段階に分けて分析を行う。

4. 1 会話開始から「依頼行為成立」までの段階

この段階では、ほぼすべての会話において、依頼側による「今は大丈夫？」などの「依頼の可能性確認」(例1番号4、例2番号4)、「ちょっとお願いがあって電話したんですけど」などの「前置き」(例1番号6)、もしくはその両方が「事情説明」や「依頼表現」に先行して現れることが観察できた。

【例1】(資料33)「依頼の可能性確認」→[返答]→「前置き」→[事情説明要求]

依頼側 JBI11	番号	番号	被依頼側 JSK11
		1	はい
あ、もしもし	2	3	うん
<u>あ、今大丈夫？</u>	4	5	<u>うん、大丈夫だよ</u>
<u>あの、ちょっとお願いがあって<軽い笑い></u>	6	7	<u>うん、なにになに？</u>

【例2】(資料14)「依頼の可能性確認」→<交渉>→[返答]

依頼側 JBI05	番号	番号	被依頼側 JSK05
		1	もしもし
あ、もしもし、「JSK05名」？	2	3	うん、はいはい
<u>あの、今時間大丈夫？</u>	4	5	<u>うんうん、なんか、うん、そんなに長く なければ</u>
あ、ほんと？	6	7	
<u>うんうん、多分5分くらい<軽い笑い>なん だけど</u>		8	<u>あー、うんうん、大丈夫大丈夫</u>

高木(2003)が指摘しているように、依頼側の「今、大丈夫ですか」の発話により、被依頼側が置かれている状況に対する配慮が現れており、それに対して被依頼側が「はい、大丈夫です」(例1番号5、例2番号8)と答えることにより、会話の成立が保証され、会話を次の働きかけに展開させる効果を持つと考えられる。さらに例1のように番号7「なにになに？」などの発話で、被依頼側は依頼側が自分に働きかけた意図を積極的に理解しようとし、次の展開(「事情説明」)を促している会話もみられた。

また、一部の会話には、「事情説明」や「依頼表現」に先行して「(依頼受諾)見込みの確認」が用いられている(約30%)。「見込みの確認」とは、依頼に踏み切る前に相手が依頼を引き受けられる可能性や相手が依頼を実行する支障の有無を確認する発話である。本調査の依頼内容に合わせてみると、「明日の午前中って用事ありますか」「言語調査とかって興味ありますか」などの依頼側の発話がそれにあたる。そのような「見込みの確認」に対して、「見込みあり」(例3)「見込みなし」(例4)「保留」(例5)の3通りの返答が観察できた。例3は、返答のすぐあとに被依頼側が自ら用件を聞くことにより依頼側に関心を示しており、協力的なコミュニケーションと言えるであろう。一方例4では、被依頼側

が用件を聞く姿勢をみせているが、依頼行為の成立に向けて積極的に働きかけるというよりは、相手に対する補償的な配慮行動であると考ええる。

【例3】(資料9)「見込みの確認」→[見込みあり]→[用件を推測する]

依頼側 JBI03	番号	番号	被依頼側 JYK03
明日ってさ、午前中ってなにか、ある？	24	25	<u>沈黙 2秒/ないですけど</u> <u>[声が小さくなる]</u>
バイトか…	27	26	<u>明日バイトですか？</u>
<あっ、あっ> > ううん	29 30	28	いや、バイトの、を<代わってほしいと か?> < 。[→]

【例4】(資料22)「見込みの確認」→[見込みなし]→[用件を聞く]→「再度見込みの確認」→[見込みなし]→[再度用件を聞く]

依頼側 JBI08	番号	番号	被依頼側 JOK08
あの一、明日って先輩暇ですか？	6	7	<u>明日はバイトー[大きな声で]</u>
あー	8	9	<u>なんかあるの？</u>
<u>そう、あの一、あのですね、9時からとか</u> <u>ってもうもう、もうバイトですか？</u>	10	11	<u>バイト、7時からバイト</u>
<笑いながら>7時？	12	14	<うん> > 、うん、<早いんだよ、朝> <
早い<ですね> <	13	16	<u><えっ、なに?> > </u>
<あーあー> > 、<そうですか> <	15		

【例5】(資料29)「見込みの確認」→<曖昧な返答が続く>→[返答保留]

依頼側 JBI10	番号	番号	被依頼側 JOK10
<u>「JOK10名」さん明日の午前中暇ですか</u>	12	13	<u>明日の午前中…は空いてるかも</u>
あ、ほんと？	14	15	<u>明日の午前中？</u>
うん	16	17	<u>うん、微妙だな</u>
あ、微妙	18		

次に、依頼の中心部となる「事情説明」と「依頼表現」について述べる。分析の結果、「事情説明→依頼表現」(例6)「事情説明のみ」(例7)「依頼表現のみ」(例8)の3種類の現れ方がみられた。「事情説明→依頼表現」と「事情説明のみ」はほぼ同じ頻度で使われているが、詳しく見ると、「事情説明」の後ろにくる「依頼表現」には、「～してもらえますか/くれませんか」のような依頼を表す典型的な言語形式を含むものはほとんどなかった。

た(表2)。その代わりに使われたのは「お願いしたいな／行ってもらえないかなと思ったんだけど」といった意思・希望表明の発話が多かった。それは、依頼側が相手に依頼する「当然性」が低いと認識したため、なぜあなたに依頼をするのかと事情説明をより明確にしたり、比較的明示度の低い依頼表現を用いたりし、依頼することによって相手のフェイス⁷を脅かす度合いをやわらげる工夫をしていると考えられる。一方、被依頼側は、頼まれた内容を早めに理解し、相手に直接的な依頼表現を言わせる前に反応してあげることも一つの配慮と言える。

また、「依頼表現のみ」は3例みられたが、どれも依頼表現のすぐあとに、被依頼側が突然の依頼に唐突感を覚え、驚いた反応が返ってきた。依頼する「当然性」の高い内容であれば依頼表現だけで依頼成立に導く可能性は考えられるが、本調査の依頼内容には不十分だったことがわかった。

【例6】(資料29)「事情説明」→「依頼」→[反応(マイナスのニュアンスを含む)]

依頼側 JBI10	番号	番号	被依頼側 JOK10
<u>あのねー、実は、あの、明日、えっとー、</u> <u>なんか友達に頼まれてっていうか、あの頼</u> <u>まれ事で、国立国語研究所に行って</u>	19	20	うん
<u>あのーなんか言語調査に関するね実験をす</u> <u>ることになってんだけど、<私が> < </u>	21	22	<うんうんうん> <
<u>それがちょっと行けなくなってしまって、</u> <u>私が</u>	23	24	うん
<u>それにもしよかったら代わりに行ってきて</u> <u>もらえないかなと思ったんだけど</u>	25	26	<u>あーーー、そっかー</u>

【例7】(資料12)「事情説明」→[反応(情報要求)]

依頼側 JBI04	番号	番号	被依頼側 JYK04
<u>えっと、国立国語研究所っていうところで</u>	30	31	はい
<u>えっと、かい、日本語の会話に関する実験</u> <u>があって</u>	32	33	はい
<u>それでね、私が高校の時の友達と一緒に</u> <u>ってる予定だったんだけど</u>	34	35	はい
<u>私のほうで急がないはずのテストが浮上し</u> <u>てきて、やることになっちゃったんで</u>	36	37	はい
<u>ちょっと都合が悪くなっちゃったので</u>	38	39	はい
<u>誰か代替りの人がいないかってことで探し</u> <u>ているんですけど</u>	40	41	<u>はい、それはいつなんですか</u>

【例8】(資料2)「前置き」→「依頼」→[反応(疑問・驚き)]

依頼側 JBI01	番号	番号	被依頼側 JSK01
ちょっとお願いがあって、電話したんですが	2		
		3	はい
実は、月曜日の、午前中9時ぐらいにね、3時間ぐらい、えっとね、国立国語研究所に行って、言語調査に関する実験を私の代わりに、「人名」さんてひとどうけてきてくれませんか<少し笑いながら>	4		
		5	何なんですか、それは<微かに笑いながら>

【表2】「事情説明→依頼表現」のパターンにみられる「依頼表現」

資料番号	依頼表現
6	私の友達と「JYK02 あだ名」で…行ってもらいたい…
7	それで、もし…、もしお願いできたら、代わりに行っていただけませんかという…<笑いながら>
8	それでね、もし明日、の午前中に時間があったら、行っていただけませんかという…
9	それで、なん、もしも行って、私の代わりに行ってもらえたらと
13	それで、あのー、もし、もし時間が空いてたら、お願いしたいなと思ったんだけど
14	で、もし時間があったら、代わりに行ってくれないかなというお願いなんだけど
16	できればなんかその人と一緒に行ってもらったりしたりしてほしいんですけど<軽く笑いながら>
17	で、代わりに「JSK06 名」、行ってもらえるかなと思ったり
18	あの、もしよかったら代わりに、行っていただけたりしたらなあと思うんですけど
27	でなんか急にいけれんくなってね、なんか、そう、「JSK09 あだ名」明日、ね、どうかねって思って。どう、どうですかね
29	それにもしよかったら代わりに行ってきてもらえないかなと思ったんだけど
31	もしよかったら行ってもらえないかなと思ったんだけど
36	その友達と「JSK12 あだ名」に行ってほしいんだけど
37	明日朝9時から3時間くらい実験とかできそう？

そして、検証資料にみられた「依頼行為成立」のサインである被依頼側の「反応発話」について、断りになりそうだという「断りのニュアンスを含む発話」(例6 番号26)、依頼に関する「情報要求発話」(例7 番号41)、「疑問・驚き」(例8 番号5)、「断りへの事情説明」(例えば、「ごめんなさい、私明日バイトなんですよ」)などと実に様々である。

4. 2 「依頼行為成立」から「断り目的達成」までの段階

依頼側の表現意図が被依頼側に伝わった後のこの段階では、被依頼側が何を配慮して断る意図をどのように伝えるか、依頼側がそれをどのように理解して断りを成立させるかが重要な課題である。

例9のように「反応発話」として「相手の依頼を断ることに対するお詫び+動かせない用事があることの説明」(番号23)が現れた場合、依頼側はすぐに了解を示してくれて、この段階のやりとりが非常に短くなる。

一方、依頼を断らなければならない決定的な事情がない場合、被依頼側は「情報要求」(例10番号24、28)をし、相手の依頼に関心を示しつつ得られた情報を断りの理由に使うことや、例11のように情報を繰り返し確認したり、言いよどんだり、依頼内容について否定的な判断や意見を述べたりするなどの行動を見せた。その他、依頼側は被依頼側に「気配り発話」⁸をかけたり、依頼内容に関するマイナスの情報を提供したりし、相手が断ることができるように逃げ道を残しておく配慮行動も観察できた(例12)。

【例9】(資料6)[お詫び+事情説明]→「断りへの了解を示す発話」

依頼側 JBI02	番号	番号	被依頼側 JYK02
明日の9時朝9時からなんだけど	20		
		21	はい
私の友達と「JYK02 あだ名」で…<行っても raitai…><	22		
		23	<ごめんなさい、私明日>>> <バイトなん ですよ
あ、そうなんだ	24		

【例10】(資料13)[情報要求]→[情報要求]→[事情説明]→「断りへの了解を示す発話」

依頼側 JBI05	番号	番号	被依頼側 JOK05
		21	<ほんと?>>
		22	あ、ほんと?
うん	23		
		24	<u>何時なのかな?</u>
朝の、9時から	25		
		26	うん
12時、まで	27		
		28	<u>えっと、いつ、いつ?</u>
明日…	29		
		30	<u>明日?</u>
		31	<u>あ、あ、明日はね、バイトがあるんだー</u>
あ、そっかそっか	32		

【例11】(資料2)[情報確認]→[言いよどみ]→[否定的な見解]→「断りへの了解を示す発話」

依頼側 JBI01	番号	番号	被依頼側 JSK01
		20	<u>にっ、9時に着いてなきゃいけないの?</u>
9時から3時間ぐらい	21		
しかもボランティアなんですけど	22		
		23	<u>交通費も?</u>

出ません、くー[申し訳ない様子]	24		
無理ならよろしいのよ<二人で笑う>	26	25	<笑いがしばらく続く>
うん…。[相手の発話の真似]	28	27	<u>うーん</u>
ちょっときついなー[また相手の真似]	30	29	<u>ちょっときついなー</u>
<u>分かりました</u>	32	31	<u>うーん</u>

【例 12】(資料 1)「気配り発話」→[直接的な断り]→「マイナス情報提供」→[言い訳]

依頼側 JBI01	番号	番号	被依頼側 JOK01
<u>無理ならいいんだけど</u>	15		
いやだ<笑いながら><二人で笑う>	17	16	<u>いやだ</u>
<u>ちょっと急ですよ</u>	18		
うん	20	18	<u>うん…、九時は多分遅刻するから</u>

4. 3 「断り目的達成」から会話終了までの段階

依頼側が断りに了解を示してくれた後のこの段階において、人間関係維持のため、依頼側と被依頼側はどのような対人配慮行動をとるかが重要な課題となる。

頼まれたのに断らなければならぬときには、「すみません、お役に立てなくて」などのお詫び表現で申し訳ない気持ちを表明することが最も多い。それによりお互いの気まずさが多少緩和されることになると考えられる。また、「『語科名』科のメーリングリストに回そうか」や「そうだね…、なんか「JBI05 名」の知り合いじゃなくて、私の知り合いみたいな人で、聞いてみようか」などと代案が可能な場合には、それを提案することがより心地良いコミュニケーションにつながるであろう。一方、頼んで断られた側も、相手に困らせた、断らせてしまったことへのお詫び表現をたくさん使っている。

蒲谷(2005)が指摘しているように、お互いが気持ち良くコミュニケーションをするために、依頼のコミュニケーションで大切なのは、むしろ断ったり、断られたりするとき、どういう態度でやりとりをしていくのかということになるのであろう。

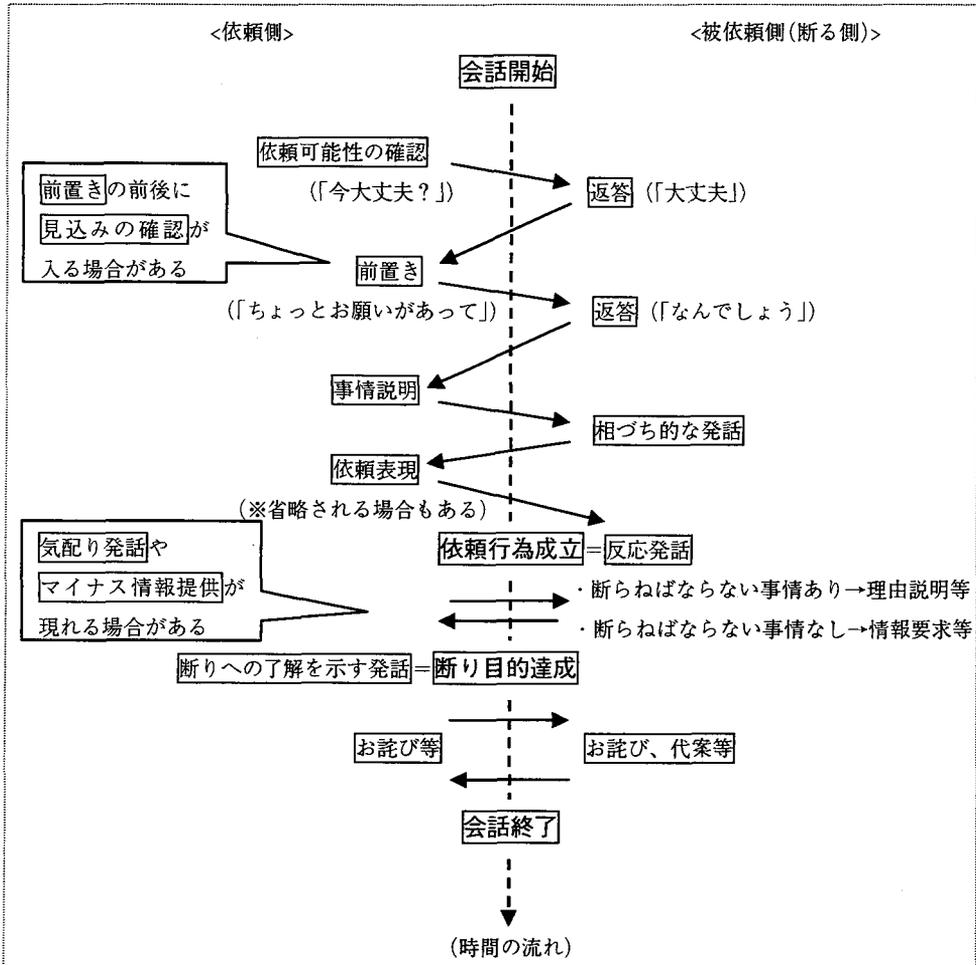
5. まとめと今後の課題

「依頼・断り」のコミュニケーションの中で、依頼側と被依頼側が、相手の働きかけをどのように理解し、そして自分の表現意図をどのような配慮に基づいてどのように表明するかについて検証してきた。その結果は【図 1】のように図示することができる。

【図 1】に示されているように、実際の会話における「依頼」でも「断り」でも一度の発話のやりとりで終わるのではなく、相手の反応を見ながら、相手との相互作用のなかで徐々に作り上げられていくことがわかった。異なる文化を背景にする日本語母語話者と日本語学習者がコミュニケーションを行うとき、言葉が通じるとしても、そのコミュニケーション行動の違いにより相手の誤解を招くおそれがある。人間関係の維持に支障を来たさ

ないためには、コミュニケーション主体として適切に「表現行為」「理解行為」をし、コミュニケーションを展開させていく必要があるであろう。本稿での結果は、日本語学習者が日本語母語話者とコミュニケーションをする際の相互理解に一助になれば幸いである。

今後は、より幅広い世代を対象として検証を続けながら、被依頼側による依頼を「受諾」する行為も検証の対象としたい。そしてそれらの結果を基に、日本語学習者による会話資料の分析を行い、そこから得られた知見がいかにか待遇コミュニケーション教育に活かせるかということについて、さらに考察を深めていきたいと考えている。



【図1】日本語における「依頼・断り」コミュニケーション構想図

注

- 1 「意図」とは、ある「主体」が、ある「行為」を行うことによって何かを実現しようとする、その主体の「自覚的な意識」のことである（蒲谷 2002 参照）。
- 2 「表現意図」とは、「表現主体」がある「表現行為」を行うことによって何かを実現しようとする、「表現主体」の「自覚的な意識」のことである（蒲谷 2002 参照）。
- 3 「反応発話」は、顧他（1998）に倣い、以下の3通りを指すものとする。

- a. 「依頼に対して積極的な態度を示す発話」: 「承諾の発話」「承諾に有利な情報を含む発話」「新情報を要求する発話」等
- b. 「依頼に対して中立的な態度を示す発話」: 「相手の先行発話を確認する発話」「依頼背景に関する情報を提供する発話」「中立的な態度を示す相づち的な発話」等
- c. 「依頼に対して消極的な態度を示す発話」: 「拒絶の発話」「依頼に不利な情報を含む発話」「依頼に対して消極的な態度を示す相づち的な発話/沈黙」「次回の依頼・代案を表す発話」等
- 4 本稿では、「断りへの了解を示す発話」を、「被依頼側の断りたい意思を認め、もうこれ以上依頼を継続しないことを伝える発話」と定義する。
- 5 蒲谷他(1998)によると、その「依頼内容」が「相手」にとって実行することの「当然性」のない場合、しかも実行するための負担が重いような「依頼内容」を、「用件レベル・+2」とする。今回設定した依頼内容は、相手にかかる金銭的・時間的な負担が大きい上に、明日で急な話であるため、依頼側にとって頼みにくく、被依頼側にとって引き受けにくい用件であり、「用件レベル・+2」に近いものと判断した。
- 6 蒲谷他(1998)では、「上下関係」と「親疎関係」の両者を併せたものとしての「相手」レベルを設定した。また、「相手レベル・-1」と「相手レベル・-2」について、以下のように例を提示している。
「相手レベル・-1」: 親しい同年輩の人、後輩・部下、家族など
「相手レベル・-2」: 極めて親しい友人、親しい後輩・部下など
- 7 Brown and Levinson (1987) は、人間がもつ基本的な欲求として、フェイスの概念を提示している。フェイスには、他者に理解・共感されたいという欲求であるポジティブ・フェイスと、他者に邪魔されたくない、立ち入られたくないという欲求であるネガティブ・フェイスがあるとされている。
- 8 ザトラウスキー(1993)は、「断りを促す発話」には、「断り/断る理由に関する気配り発話」、「相づちによる気配り発話」、「接続表現による気配り発話」、「陳謝/感謝/残念な気持ちを表す発話」の4種類があり、「勧誘応答の話段」における「気配り発話」は、「断り」を促し、被勧誘者が断りやすくする発話であるという。「依頼・断り」のコミュニケーションにも「気配り発話」が出現し、同じように機能していると考えられる。

参考文献

- Brown, P. and Levinson, S. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー:「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号、41-52.
- 宇佐美まゆみ(2003)「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」、『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成13-14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2)(研究代表者:宇佐美まゆみ)、研究成果報告書、4-21.
- カノックワン・ラオハブラナキット(1995)「日本語における「断り」—日本語教科書と実際の会話との比較」『日本語教育』87号、25-39.
- (1997)「日本語学習者にみられる「断り」の表現—日本語母語話者と比べて」『世界の日本語教育』7号、97-112.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)『敬語表現』、大修館書店.
- 蒲谷宏(2002)「「意図」とは何か—「意図」をどのように捉えるか—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15、1-14
- 蒲谷宏・待遇表現研究室(2003)「「待遇コミュニケーション」とは何か」『早稲田大学日本語教育研究』第2号、55-76.
- 蒲谷宏(2005)「<行動に展開する表現>におけるコミュニケーション上の工夫」『新「ことば」シリーズ18 伝え合いの言葉』国立国語研究所、40-48.
- 熊井浩子(1993)「外国人の待遇行動の分析(2)—断り表現を中心にして」『静岡大学教養学部研究報告人文社会科学篇』第28巻第2号、266-277.

- 顧明耀・趙剛・于琰「会話分析による日中対照研究—依頼のストラテジーの考察」『広島女子大学国際文化学部紀要』、6、7-26.
- ザトラウスキー・ポリリー (1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』、くろしお出版.
- 施信余 (2005)「依頼に対する「断り」の言語行動について—日本人と台湾人の大学生の比較—」『早稲田大学日本語教育研究』第6号、45-61.
- 謝韞・木山幸子・李恩美・施信余・木林理恵・宇佐美まゆみ (2004)「TUFFS 会話モジュールの日本語キットと『BTS による多言語話し言葉コース—日本語 2』における依頼行動の対照研究—会話教育への示唆—」『言語情報学 3 第1回言語情報学国際会議報告集 言語情報学—現状と未来—』21世紀 COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科、323-341.
- 高木美嘉 (2003)「依頼に対する「受諾」と「断り」の方法」『早稲田大学日本語教育研究』第2号、137-149.
- 藤森弘子 (1995)「日本語学習者に見られる「弁解」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合」『日本語教育』87号、79-89.
- 森山卓郎 (1990)「断りの方略—対人関係調整とコミュニケーション」『言語』8月号、59-66.
- 横山杉子 (1993)「日本語における日本人に対する断りと日本人のアメリカ人に対する断りの比較—社会言語学レベルのフォーリナートーク」『日本語教育』81号、141-151.